

地域メディアと災害の記憶～ムラピ山の災害ミュージアム視察報告

Community Media and Memories of Disaster—Visits of the Two Disaster Museums at Mt. Merapi

金山 智子

KANAYAMA Tomoko

Abstract 自然災害による地域の破壊、止むことのない地域開発、加速する限界集落化と、物質的な手触りや手掛かりが急速に失われていく地域の風景や文化をどのように記憶・記録していくかは、現代の日本社会の喫緊の課題である。メディアが人びとの集合的記憶に大きな意味をもつ現代において、地域メディアが地域の集合的記憶の構築に果たす役割は今後重要となるだろう。本稿では、自然災害によって破壊された地域の記憶を構築する地域メディア研究の一環として2016年9月に実施した、ムラピ山災害ミュージアムの見学と関係者らへのヒアリング調査について報告する。

Keyword 地域の記憶、地域メディア、集合的記憶、災害、ミュージアム

1. はじめに

2011年の東日本大震災以降、「防災は何にも増して重要」という世論が高まる中、震災の記録と記憶をいかにアーカイブし継承していくかが何よりも重要な課題であることが指摘されている。2011年の東日本大震災では大規模なアーカイブプロジェクトが展開され、例えば、国会図書館と総務省との協働による東日本大震災アーカイブ構築では、復興や研究、防災・減災教育への活用・促進を目指した。NHKデジタル映像アーカイブでは、生存者の証言や津波や原発事故の映像を分析、防災・減災へ活かす取組みへとつながっている。震災の記録と記憶が防災・減災に向け有効活用されることが主流になる一方、大震災の個々人による経験・体験を当事者の小さなストーリーの蓄積としてのアーカイブをどのように生むかが課題となっている。¹

記憶は、その形式が内容に影響を与え、その変化は記憶の技術の歴史に大きく関わる。ルロワ=グーランは集団的記憶の歴史について情報伝達方法から5つの時代に

分類しているが、その中で18世紀の活字印刷は集合的記憶を完全に変えていった。² 書物による記述と集合的記憶の拡張、図書館や古文書など国家による管理、集合的記憶を再確認する記念日の一般化と、国家による集合的記憶の巨大なイメージのシステムが形成され、銅像などのモニュメントや、英雄や記念日の名をつけた通りなど、記念空間化による近代的メモリアが構築された。³

集合的記憶の消費がすすむと同時に、映像や音声、ネットなどマルチメディアやICTの急速な発達、記憶の生産と消費の個人化と社会化を加速させる。⁴ 近年では市民によるアーカイブ活動が活発になり、小さな集合的記憶がネット空間に構築されている。

メディアが人びとの集合的記憶に大きな意味をもつ現代社会において、マスメディアを介した戦争や国家イベントに関する研究は多く、アルヴァックスの集合的記憶⁵を中心としたMedia Memory Studiesが確立されている。一方、地域の集合的記憶に関しては、メディアを活用した実践的な取組みを通して研究や活動が進められてお

1 渡辺直・田中孝演宜「3.11震災アーカイブ活用の可能性～防災・減災、復興に生かすために～」放送研究と調査July 2013

2 アンドレ・ルロワ=グーラン『身ぶりと言葉』荒木享訳 新潮社1973

3 港千尋『記憶』講談社2002

4 前掲 p.178

5 アルヴァックス・M『集合的記憶』小関藤一郎訳、行路社

り、最近では、記憶や記録を一つの表現したアート活動やコミュニティ活動も増えている。⁶

こういった状況下、地域の集合的記憶に関しては、コミュニティの過去を意味付け、個人の日常的な経験を共同体の未来へとつなげる上で重要であり、メディアは過去を解釈するツールとして機能すること⁷、地域の記憶を共有することは地域アイデンティティの形成と強化につながること⁸、そして、時空間を超えて個人の体験を共有する上で、物語という通路を通して経験者と非経験者が心で結び合う心的結託が必要であること⁹が指摘されている。

繰り返される自然災害による地域の破壊と復興、加速する限界集落化、無駄に続けられる地域開発と、物質的な手触りや手掛かりが急速に失われていく地域の風景や文化の記憶をどのように記録していくかは、現代の日本社会の喫緊の課題だといえよう。その点において、コミュニティFMやローカル新聞など伝達系メディアと公民館や集会所など空間メディアの両方を含む地域メディアの役割は重要となる。

この課題の下、筆者は地域メディアの集合的記憶に関する研究の一環として、地域住民や被災者たちによって建てられた災害ミュージアムを見学した。本稿では、インドネシアのムラピ山噴火の記憶を保存した2つのミュージアムと関係者らへのヒアリングについて報告する。

2. ムラピ山の震災ミュージアム

2016年9月17～20日に、ジャワ島中部ムラピ山周辺にある3つの村落で、コミュニティラジオ放送を中心とするさまざまな復興活動に関するフィールドワークを行った。ここでは、その際に訪問したSira Hartaku Miniミュージアムと災害ドキュメンタリーミュージアムについて報告する。

2.1. Sira Hartaku Miniミュージアム

2010年10月25日に噴火したインドネシアのジャワ島中部のムラピ山は350名以上が死亡、35万人以上が避難生活を送った。現在復興住宅で生活する住民は多いが、レッドゾーン（居住禁止区域とされる山嶺の一部）にある自分の土地に戻って生活を始めた住民もいる。

レッドゾーンは、噴火により森林地域の樹木を消失、家屋や農地は破壊され、従来の生活を営むことが困難なエリアであり、政府からの支給は受けられない。火山と共に生きてきた人々の中には、噴火の危険を承知でここでの暮らしを望む人たちも少なくなく、水や電気、生活費など自前で生活環境を築いている。

Sisa Hartaku Mini Museumは、レッドゾーンに位置するPetung集落に建てられた。ムラピ山頂から5kmに位置するこの集落は、素晴らしい自然と伝統文化で人気の高い観光地であった。ムラピコーヒーや品質の高いミルクの生産地として知られ、伝統音楽や踊りなど地元文化も大切にしてきた集落である。その全てを、噴火による火砕流と火山灰で消失した。まさに集落の死であった。

Ryan Sriyantoさんも家や家財全てを消失し、心を打ち砕かれた住民の1人だった。焼けた家と火山灰に埋もれた残骸下には数え切れないほどのストーリーが埋もれており、その美しい記憶をそのまま放置しておきたくないというRyanさんは焼け跡から残骸を片付け始めた。作業をすすめる中で以前の様々な記憶が蘇り、傷心のRyanさんにとって小さな希望となった。¹⁰

椅子や机、ティーカップやスプーン、ラジオやミシン、オートバイ、ライターなどたくさんのもを集め、それを焼けた家の中に保存していくRyanさんに対し、彼の家族を含め、近所の人たちからは傷心あるいは怒りからきた不理解な行動と思われていたという。

ネガティブな反応が多い中で、ボランティアからミュージアムにしたらかと提案され、ここを小さなミュージアムとした。徐々に復興がすすみ、レッドゾーンを対象とするジープツアーで観光客などがこの地に訪

6 20世紀後半のアーカイヴァルアートとは異なる表現活動。例えば、小川明子らによるデジタルストーリーテリングの実践、remoによる地域の古い8ミリフィルムを介してコミュニケーションを創出するアーカイブの可能性、小森はるか+瀬尾夏美による地域の風景と人々の言葉の記録の制作など、表現としての地域の記録の意味を問うものが増えている。

7 Zelizer, B. (2001) Collective Memory as "Time Out": Repairing the Time-Community Link, In G.J. Shepherd & E.W. Rothenbuhler (Eds.), Communication and Community, New Jersey, Lawrence Erlbaum.

8 福田珠己「地域の記憶—異質性と均質性の間で」矢野敬一他編『浮遊する「記憶」』青弓社2005

9 阿部安成「記憶から歴史へ—歴史から記憶へ」矢野敬一他編『浮遊する「記憶」』青弓社2005

10 The Sisa Hartaku Mini Museumカタログも参照



れるようになると、この小さなミュージアムが意味を持ち始める。同時に、Ryanさんのミュージアムにネガティブであった周辺の人たちも、自身の被災物などをここに置くようになる。

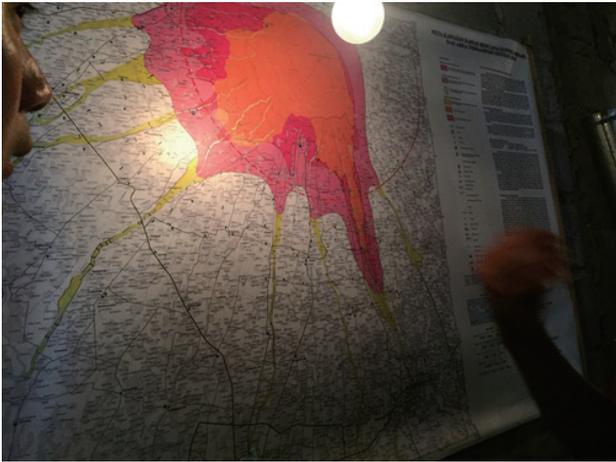
見学した際、火山の破壊力と震災の恐ろしさや震災を

感じたのは当然だが、噴火で被災する前の暮らしや展示されたモノのストーリーがその場で語られることは、そこにあった日常生活や地域文化を知るいい機会となった。

2.2. 災害ドキュメンタリーミュージアム

次に見学したのは、Sorodokan集落の災害ドキュメンタリーミュージアムである。300世帯の災害復興住宅の一角に建てられたこのミュージアムは、若いSondonさんがSorodokan集落の集落長になった時に企画され、2016年3月に完成した。アイデアのベースとなっているのは、Sondonさんがかつて日本で研修を受けている時に、有珠山の昭和新山資料館や神戸アーカイブ写真館で災害時や災害前後の記録を保存することを学ぶ機会があり、この経験をもとに、自分たちの震災の記録を保存し、村の子どもたちの防災教育に役立てたいと考えたことにある。





先に述べたSira Hartakuミュージアムと異なり、建物は復興住宅を使い、展示は写真や資料、語りのテキストなどが中心となっている。展示方法や展示物のデザインなどに関しては、Sondonさんらが行っており、中には水素を使って噴火を再現するような手作りのインタラクティブな展示もある。地域の小学校などに配布する防災教育のツールも展示されていた。

今回の視察では、名古屋大学の小川明子准教授がデジタルストーリーテリングによる震災の記憶のワークショップを実施した。Sondonさんが、iPhoneやiPadなど情報機器を活用し、若者たちが中心となって震災の記憶を構築する一つの手法としてこれを検討している。

復興住宅の中に、自分たちの震災の記憶の場をつくり、その記憶の保存と更新、記憶を活用した教育などを地域



住民自らが実践していくのは、ユニークな試みだといえる。そして、国内外の火山や災害の研究者、他の地域の人たちなど、このミュージアムを訪問する多くの人たちがどのような人たちで、何に関心をもっているのかを地域住民が自分のこととして肌で感じることはできるのは有意義だ。

3. 被災住民による記憶の展示の意味

今回ムラビ山の噴火による災害の記憶を展示している2つのミュージアムを見学したが、一般的な災害ミュージアムとは以下の5点において異なる。

- ① 被災した人たちの近くにあること
- ② 被災した住民の手作りであること
- ③ 住宅（という空間）を使っていること
- ④ 自分たちの物や記録を保存していること
- ⑤ 自分たちで運営していること

震災の記憶を誰に想起させるかという点において、この2つのミュージアムは極めてユニークだと言えよう。アルヴァックスは集団の成員として考えたり思い出したりする習慣や能力を失わずにいることが必要であると述べているが、被災した住民たちの生活圏内にミュージアムが存在するという事は、記憶を想起する環境の中に住んでいるということになり、常に記憶を更新していくことが可能となる。

見慣れた家あるいは復興住宅という空間は、震災が住民の暮らしの中で起こったことを容易に想像させる。住民による手作りも、被災した当事者が何をどう伝えたいかという点において彼らの震災の物語に寄り添っており、キュレーターやアーキビストといった専門家らによる展示とは一線を画す。「その空間で出会う物や、事物が全体の中で占める位置が、われわれに多くの人びとに共通な存在様式を想起させる」¹¹とアルヴァックスが指摘するように、まさに、この空間とそこにある物たちは普通の人たちの家で起きた出来事を想起させるのである。

現在の多くの国内外の震災センターは、写真や映像などで災害のイメージを創出しているところは多いが、個人的記憶の現物資料を展示しているところが少ないこと

11 アルヴァックス、p.7

が指摘されている。¹² 今回見学した2つのミュージアムは、個人的な記憶でありながらも集合的記憶として想起させる。同時に、震災の記憶だけでなく、地域の人たちの震災前の暮らしを想像することにつながっているという点においても、一般的な震災センターと異なる。先に述べたように、この2つの小さな災害ミュージアムは、コミュニティの過去を意味付け、そして、住民の日常的な経験をコミュニティの未来へとつなげる上で重要な役割を果たしている。換言すれば、このミュージアムは過去を解釈するツールの機能を果たす地域メディアとして存在しているのである。

また、震災の記憶の保存よりも、むしろ地域の記憶を共有することが地域アイデンティティの形成と強化につながっていることが、この2つの震災ミュージアムの取り組みからみえてくる。震災からの復興過程において、地域アイデンティティを強化することは当然であるが、災害に強い地域作りにおいても不可欠である。

筆者は、帰国後にメールを通してフォローアップインタビューを実施した。¹³ 特に、レッドゾーンに作られた Sisa Hartaku ミュージアムは、今後ムラピ山が噴火した場合、再度火砕流に飲み込まれる危険が大きい場所であり、保存した記憶や記録は消失してしまう可能性が高い。それでも、あの場所に作ったことは筆者にとって大きな疑問の1つであった。これに対して、Sisa Hartaku ミュージアムに関わる Andi Ferdana さんは次のように答えた。

当初は、周辺に散在された住民達の遺品を若者たちが一カ所に集め、災害のメモリアル的な場所という位置づけで設立された。確かにあの場所は居住禁止区域に指定されていることは事実であるが、2010年の災害を忘れないためにもあの場所に設置することが重要だ。他の要因としては、あの場所には博物館として利用するに適した損傷した家屋が残っていたこと、設立時に住んでいた仮設住宅周辺には、博物館を設置するための十分な土地がなかったことが挙げられる。

今回の見学では、レッドゾーンに戻って有機コーヒー農園経営をされている方に、周期的に噴火を繰り返すムラピ山でまた農園を失うことへの不安について訊ねた。

「ムラピ山は友達だから。怒った時は少し離れて、機嫌が直ったらまた戻る」と語っていた。ムラピ山の村落で災害と観光について研究されている間中光さん（日尼通訳として同行）は、「復興住宅も火砕流が到達する可能性は厳然としてあります。ただ彼らには彼らのムラピに住み続ける意味があり、そのために災害のリスクと隣り合わせで生きることを受け入れているのかなと思います。また、それ故にムラピに暮らす者という仲間意識もあります」と話すが、火山との共生や火山文化といった地域独自の文化やアイデンティティに対する理解への必要性を感じる。同時に、火山国で自然災害大国の日本においても、火山文化や火山との共生が存在していることを認識する機会にもなった。

今回は、インドネシアのムラピ山という、筆者にとっては異なる文化圏の災害ミュージアムにおいて、小さな災害ミュージアムの中に散らばる個人の物語という通路を通して、震災の経験者と非経験者がコミュニケーションできることを実感できたことは意義深い経験となった。住民による災害ミュージアムは、地域の記憶を未来につなげている1つの地域メディアとしてのあり方を提示しているといえるであろう。

12 阪本真弓・矢守克也「災害ミュージアムを通じた記憶の継承に関する一考察」自然災害科学29-9 pp.179-188 2010

13 2016年12月にメールインタビュー実施